

## 中国の社会学

孫 本 文 著  
星 明 訳

### 〔抄 録〕

この翻訳は、アメリカの *Social Forces* に掲載された孫本文の *Sociology in China*<sup>(1)</sup> を全訳したものである。本論考では中国に社会学が伝播した 1900 年ごろから 1948 年までの、中国の社会学の受容、発展そして現状を具体的な事実をあげながら、簡潔にまとめたものであり、中国の解放前の社会学の状況のほぼ全体像が述べられている。ほぼ全体像といったのは、ブルジョア社会学のみが扱われ、社会主義や史的唯物論をベースにした社会学はそもそも除外されているからである<sup>(2)</sup>。

孫は北京大学文科哲学専攻に在学中の 1916 年に中国人ではじめて社会学を講じた康宝忠教授<sup>(3)</sup>の授業を受講した。卒業後中高校で教職に就いたのち、アメリカに留学し<sup>(4)</sup>、そして帰国後は上海および南京の大学で社会学の教育と研究に従事するとともに、東南社会学会<sup>(5)</sup>およびそれを発展させた中国社会学社<sup>(6)</sup>の創立および運営の中心人物となった。それに加えて、中華民国政府の仕事にも深く関わった。解放前の中国でもっとも多くの著作を書き著わし、かつもっとも著名な社会学者であった<sup>(7)</sup>。

しかし、新中国の成立後は、孫自ら旧社会ではブルジョア思想をもっていたし、自らの社会学はブルジョア社会学だったとして自己批判した<sup>(8)</sup>。したがって、ここに訳出した論考はまさにかれがブルジョア社会学のコンテキストで書いた最後のものの一つである<sup>(9)</sup>(この論考の掲載誌 *Social Forces* の当該号の発行が 1949 年であるので、前年の 1948 年ごろに書いたと推測できる)。

なお、この訳稿の内容をより深く、より広く理解するために、孫本文の自伝(資料 1)、著書『社会学原理』のとびらの記載(資料 2)、かれが出版を計画した著作集の目録である保存旧著選集の巻次和内容<sup>(10)</sup>(1927～1948)(資料 3)および孫本文学術年譜(資料 4)を付録とした。

中国には早くも 4000 年前には社会思想家がいた。さまざまなタイプの社会思想が周代の紀元前約 1100 年から 250 年の間にかなり発達した。しかし、科学としての社会学は中国の起源のものではなく、50 年足らず前にヨーロッパとアメリカから輸入された<sup>(11)</sup>。まず外国の社会学書の中国語訳によって、次に徐々に社会学の学生の教育および実際問題の研究をととして、

依然としてその形成は初期段階であるけれども、中国の社会学はその体系的な学問性のある程度まで発展させてきた。この論文は、非常に簡潔に、中国の社会学の起源、発展そして最近の趨勢をとりあげるものである。

## 中国の社会学の発端

社会学は、19世紀末に「群学」(the science of groups)として、中国の知識界にはじめてあらわれた。このタイトルをもつ最初の書物は、嚴復がH. スпенサーの *The study of sociology* を『群学肄言』として訳したものであり、1903年に出版された<sup>(12)</sup>。「社会の科学」あるいは「社会学」という用語は、著名な学者章炳麟によって、嚴の書物よりちょうど1年早く日本の社会学書の翻訳で1902年にはじめて採用された<sup>(13)</sup>。その時から、この社会学ということばがひろく採用された。それに対して「群学」ということばはもはや知識界では使われなくなった<sup>(14)</sup>。

## 新文化運動と社会学

20世紀の最初の10年間におよそ6冊の社会学の本が出版された。1912年の中華民国の樹立以来ずっと、初期の政治的な激変に加えて、さまざまな種類の社会運動が国内の各地に広まっていた。民国初期の重要な運動の一つは、1919年に蔡元培や胡適のような卓越した哲学者や教育者によってはじめられた有名な「五・四新文化運動」である<sup>(15)</sup>。これらの運動をとおして、欧米の哲学、芸術、技術、自然科学のみならず社会科学の新たな発展のすべてではないとしても、それらのほとんどが中国に紹介された。社会思想、社会問題そして社会学の研究は、この運動の重要な側面として、すぐさま知識階級の注意を引いた。多くの欧米の社会学の本がこの時から絶えず中国語に翻訳された。これらの翻訳をとおして、欧米の社会学のさまざまな学説の主要な理論が中国に紹介された。たとえば、社会心理学派はF. H. ギディングズ、G. ル・ボン、C. A. エルウッド、W. マクドゥーガル、M. D. ヤング、そしてG. W. オルポートの著作が、文化学派はW. F. オグバーン、B. K. マリノフスキ、C. ウィッスラー、A. F. ラドクリフ＝ブラウンそしてR. W. ファースのものが、人類学派はLetouneau、L. H. モーガン、L. W. ローウィ、E. A. ウェスターマークのものが、システム学派はF. テンニース、E. デュルクーム、C. ブーグレ、Binder、M. ギンスバークそしてDeatのものが、進化論学派はスペンサー、モーガン、Letouneau、F. C. ミュラー＝リアー、C. A. エルウッドそしてAbelのものが、哲学学派はMackenzie、Urwic、そしてL. T. ホブハウスのものが、社会病理学ないし社会問題学派はHenry George、C. ロンブローソ、Binder、Fairchild、Blackmar、GillinそしてThompsonのものが取りあげられた。

## 大学における社会学の教育

われわれが知る限り、社会学は 1906 年に清朝政府によって公布された京師政法学堂 (The National Political College of Peking) のカリキュラムにはじめて付け加えられた。4 年後、京師大学堂 (The National University of Peking) のカリキュラムが公布され、そのなかに社会学の 2 時間のコースが第一学年すべてに設けられた。しかし、このカリキュラムの要件は大学の規程に記録されているだけである。実際にこれらのコースが開設されていたのか、あるいはだれがそれを教えていたのか、といった証拠はなにもない。

民国の最初の 10 年間、いくつかの有名な大学が社会学の科目を提供しはじめた。それらのなかで、上海の滬江大学では 1913 年に [社会学部が設置され], J. A. Dealey, D. H. Kulp II, H. S. Bucklin といったブラウン大学からきた数人のアメリカ人教授によって社会学が教授されはじめた。次に、北京大学で 1916 年に康宝忠教授によって社会学が講じられた。康は中国の大学で、最初に社会学を教えた中国人教授である。清華大学では、1917 年に C. G. Dittmer 教授によって社会学が講じられた。厦門大学が 1917 年に歴史社会学部を創設した。ほぼ同じころ、燕京大学が社会学を教えはじめ、後に社会学・社会事業学部に進化した。J. S. Burgess 教授は組織者の一人であった。国立中央大学<sup>(16)</sup>は 1920 年以前に社会学を講じたが、1927 年まで社会学部は設置されなかった。

それ以来、多くの大学が社会学部を開設してきた。1930 年には、社会学部をもつ大学が 11、歴史・社会学部をもつ大学が 2、社会学・政治学部をもつ大学が 2、人類学・社会学部をもつ大学が 1 校あった。1947 年には、社会学部をもつ大学が 18、歴史・社会学部をもつ大学が 2、社会行政学部をもつ大学が 1 校あった。これらの学部に加えて、他の学部でも社会学の教育を重視する傾向があった。工学、農学、商業そして医学を除いて、他のすべての大学は、現在、すべての 1 年生と 2 年生の学生ための社会科学の必修科目の一つとして社会学を教えている。

## 社会学会の設立

南京および上海の多くの大学教授が、1928 年に社会学の発展のために東南社会学会を組織した。「社会学刊」という学会の季刊が、翌年創刊された。学会のメンバーは、学会の名前からわかるように東南地区の省の人びとのみで、全国からの参加はなかった。つまり、地方の学会に過ぎず、全国的ではなかった。1929 年に、北京のなんんかの教授が東南社会学会に加入した。その間に、学会のメンバーは全国規模の組織が緊急に必要だという思いに至った。一致して、東南社会学会を基礎にして 1930 年に中国社会学社を設立し、孫本文 (正理事)、許仕廉 (副理事)、呉景超 (書記)、陶孟和、陳達、潘光旦、游嘉徳、應成一、錢振亜の 9 人の理事が選ばれた<sup>(17)</sup>。「社会学刊」は中国社会学社の公式の雑誌として、継続して出版された。1930 年

2月に、学社の第1回の年会在上海で開催された<sup>(18)</sup>。1937年に勃発した抗日戦争以前、第6回の年会在南京、北京、あるいは上海で開催されてきた。抗战中、1943年春に重慶、昆明、成都で同時に開催された。戦後、1947年10月1日、2日の同日に南京、北京、広東、成都で第8回の年会在開催された。

## 社会学の最近の趨勢

上述したように、中国の社会学の発展の最初の段階は翻訳期であり、第2段階は研究・調査期といえる。

### 1. 社会調査と研究の発展

小規模な社会調査が、さまざまな大学でなんらかのアメリカ人の教授に指揮されて、民国の10年間にはじまった。清華大学のC. G. Dittmerは、1917年に北京近郊の人びとの生活費を、S. A. GambleとJ. S. Burgessは1918年から1919年に北京の一般的な社会調査を、上海大学のD. H. Kulpは広東省の潮州の村の農村社会調査を、南京大学のJ. L. Buckは1923年に安徽省の蕪湖の農民家族を、C. B. MaloneとJ. B. Taylorは1922年に五つの省の240の村の農村状況を調査した。少し後に、1924年に上海大学のH. S. Bucklinが上海の近郊の村、潘家行の社会調査を行なった。2年後、社会調査研究所が中米教育文化基金によって北京に設立された。所長の陶孟和は北京と天津の労働者の主として生活費に関わる多くの社会調査に着手した。中国研究院の社会調査研究所が1928年に上海に設立された。後に、南京に移転した。北京の研究所以はその後間もなく南京の研究所に統合された。

同時に、さまざまな大学の社会学部もまた多くのすぐれた社会調査と社会研究を行なった。清華大学の李景漢（Frank Li）は、1927年に『北平郊外之鄉村家庭』（*Rural Families in the Vicinity of Peiping*）および1933年に『定県社会概況調査』（*General Social Survey of Ting-Hsien of Hopei Province*）を出版した。これはこれまでに中国の農村地域について行なわれたもっとも包括的な社会調査である。それは17章、828ページからなり定県の人口、教育、健康、生活費、リクリエーション、慣習、信仰、税、財政、農業、工業と商業、農村の信用貸、そして飢饉を記している。1931年に、燕京大学社会学部が北京近郊の小規模な町、清河の社会調査を行なった。1932年に、中央大学社会学部が南京近郊のChiang-Meo-Tsun〔蒋王廟村か？〕の村の農村社会調査を行なった。同様の社会調査が、抗日戦争前、異なった省のさまざまな地域で実施された。1943年から1945年まで、社会部統計室によって実施されたいくつもの社会調査がある。そのなかには、重慶近郊の小規模な町「北碚総合社会調査」、四川省の省都「成都社会概況調査」そして「重慶の240人の労働者家族の生活基準」がある。

人口調査に関しては、清華大学の陳達が、1938年に〔清華大学〕国情普查所を創設した。

かれは 1939 年に雲南省の呈貢県の人口研究に近代的な調査方法を用いた。後に昆明市と湖「滇池」を取り巻く三つの県〔昆明県、昆陽県、晋寧県〕の調査を行なった。これらのセンサスの結果はかれの著『現代中国人口』にとりいれられた。

大学の教授たちによって行なわれた多くの社会的、社会学的な研究が最近 20 年間にさまざまな定期刊行物に発表されている。多くの同類の調査がいまなお進行中である。

## 2, 中国の社会学的資料の強調

初期の社会学者たちのもっとも主要な研究は外国の書物の翻訳か、外国の社会学理論を中国に紹介することであった。1930 年に、中国社会学社が創設され、そして中国の社会状況についての研究データが徐々に蓄積されて以来、社会学の著述は外国の理論や外国の社会状況の推奨から、中国の社会学的なデータから得られたかれら自身の理論や問題の構築へと次第に変化してきている。このことは、潘光旦の『中国之家庭問題』(1928)、陳達の『中国労働問題』(1929)、許仕廉の『国内幾個社会問題討論』(1929)、陳達の『人口問題』(1936)、柯象峯の『中国貧窮問題』(1937)、李景漢の『中国農村問題』(1937)、4 巻で 1044 ページからなり、より詳細に社会問題をあつかった筆者の『現代中国社会問題』(1942-1944)などにみられる。筆者のうえの本は中国の家族、人口、農村共同体そして労資関係をあつかっている。筆者の初期の本である『社会学原理』(1935,1945)は、中国の実例を広範囲に用いているし、また筆者の最近の本である『社会心理学』(1946)もそうである。これが最初の 20 年間の中国の社会学的著作における新たな発展の一つである。

## 3, 最近の社会学理論の中国への導入

ヨーロッパとアメリカの社会学の新しい発展が、最近の数年間に中国に紹介されている。W. F. オグバーン、C. M. Case, W. D. Wallis そして M. J. ハースコヴィッツによって先導された文化理論は、筆者の『社会学上之文化論』によって早くも 1927 年に紹介された。イギリスの B. マリノフスキー、ラドクリフ＝ブラウン、R. ファースの理論は呉文藻と費孝通によって紹介された。呉の「ラドクリフ＝ブラウンの社会学に対する貢献」、費孝通・張之毅・田汝康のマリノフスキーの『文化論』とファースの『人文類型』の翻訳である。ヒューマン・エコロジーは筆者の論文「アメリカ社会学の最近の趨勢」で紹介されて、後に燕京大学の許仕廉とかれの同僚たちによって紹介された。都市社会学は 1929 年に、呉景超の著『都市社会学』によって紹介された。Thompson, Fairchild, Reuter, Ross, Carr-Saunders らの人口理論が陳達、呉文藻、柯象峯そして孫本文によって紹介され、陳達によって労働論が、今日の中国でたった一人の優生学者である潘光旦によって優生学が、論文や著書で大いに発展した。知識社会学は李安宅の 1946 年のかれによる K. マンハイムの訳書『知識社会学』で、S. C. ドッドやその他の人たちの S 学説<sup>(19)</sup>が筆者の 1946 年の論文「近時社会学上一種新理論—S 学説—」で展開された。筆者

の最近の著書『近代社会学発展史』はこれらの新たな発展をすべて論じている。

#### 4, 社会学の体系的な傾向

こういった観点から、中国での社会学の発展の第3段階は体系的傾向と特徴付けられる。朱亦松の『社会学原理』（1928）、孫本文編の『社会学大綱』（1931）、応成一の『社会学原理』（1932）はすでに総合的な傾向を示していた。筆者の『社会学原理』（2巻本、改定版1945）、筆者の論文「社会体系発凡」（社会体系概論）（1944）、「社会学的基本観点」（1945）、「社会学的領域」（1946）は社会学の総合的なないし体系的観点をとくに重要視している。

#### 5, 社会学の専門用語の標準化

社会学の専門用語の中国語への翻訳は、社会学の発展の初期段階では重要な課題であった。筆者は1929年に、純社会学的な334語の術語を選び、それらを中国語に翻訳する最初の取り組みを行なった。3年後に、国立編訳館が社会学の術語の翻訳と標準化のための、25人の社会学者を含む委員会を組織した。翻訳された術語の検討と再検討をとおして、委員会の作業の結果が1946年に出版された1,818語の術語集<sup>(20)</sup>に盛り込まれた。

#### 6, 社会事業と社会行政への社会学の実践的な応用

1940年の社会部の創設以来、社会事業や社会行政の分野の行政スタッフが緊急に必要なになった。その結果として、社会学部では学生数が、ここ数年、コンスタントに増加してきた。社会学の多くの教授は、以前は社会事業や社会行政に注意を払わなかったが、現在は社会学の応用の主たる領域とみなしている。かれらは、同僚たちにこれらの領域の研究を重要視するように注意を促しはじめた。かれらは社会部が社会政策と社会法を立てることを補佐した。したがって、社会事業と社会行政は数年前には社会学界の流行になった。

その結果、学生の実際の必要に合わせるために、社会事業入門、ソーシャル・ケースワーク、グループ・ワーク、コミュニティ・オーガニゼーション、社会行政原理、社会救済、社会保険、社会政策、社会法、児童福祉そして社会保障といった社会事業と社会行政の多くの課程が社会学部の課程のなかに増えてきている。このプログラムは全国のさまざまな大学の代表者によって承認され、そして社会学部の標準的な課程として教育部によって公布された。ある大学は社会事業・行政学部までも創設したし、また他の大学は社会学部のなかに社会福祉行政学科をもっている。しかし、実際問題として、学生の主たる関心はやはり社会事業や社会行政より社会学にある。現在では、社会学の教授の大多数にとって、社会事業ないし社会行政の課程は社会学の学生のための職業教育とみなされ、学部の唯一の目的とはみなされていないかもしれない。



## 結論

上述の分析から、われわれは、中国の社会学は 19 世紀末にはじまって以来、継続して発展してきたと結論できよう。最初はヨーロッパとアメリカの社会学の翻訳と解釈の段階をとおし非常にゆっくりと進み<sup>(21)</sup>、次は当初アメリカ人の教授の指導を受け、続いて中国人の社会学者によって行なわれたオリジナルな研究と調査の段階を経た。最後に、社会学理論の体系的な公式化の段階、そして社会事業や社会行政の分野への社会学原理の応用の段階に達した。しかし、中国の社会学は依然としてこの段階のはじまりにある。中国の社会学の将来の発展は、大部分は大学の教授と社会学の学生の仕事と努力にかかっているのである。

### 〔訳者注〕

- (1) Pen-wen Sun, 1949, *Sociology in China, Social Forces*, vol.27, no.3, pp.247~251.
- (2) 孫本文は代表作の『社会学原理』の第 26 章「総結：社会学原理的应用」のなかで、社会学と社会主義を混同することに反対し、史的唯物論で社会学を解釈し、社会学を一種の史観とする主観的な見解に反対している。しかし、社会主義や史的唯物論を研究することには反対していない（孫本文, 1935, 社会学原理, 商務印書館, pp.631~632）。
- (3) 康宝忠（心孚）は早稲田大学の卒業生である（許妙発, 1991, 康心孚, 中国大百科全書（社会学）, 中国大百科全書出版社, p.133）。
- (4) 1921 年の留学から 1926 年の帰国までに、イリノイ大学（ここで修士号取得）、コロンビア大学、ニューヨーク大学（博士号取得）、シカゴ大学で社会学および関連科目を学んだ。
- (5) 1928 年 10 月 28 日、上海八仙橋青年会（現在の上海市黄浦区西藏南路 123 号、上海錦江都城青年經典酒店）で成立会を開催。
- (6) 1930 年 2 月 8 日、上海四川路青年会で成立会を開催。中央、金陵、燕京、清華、北大、厦門、滬江、光華、復旦、大夏、協和の各大学の代表など 100 名が参加（「中国学会社成立会記」、1930、『社会学刊』, 第 1 巻第 4 期, pp.1~2。実際は巻末から 10 ページの記述であるが、それぞれの論文、書評、記事ごとにページ数がはじまっている）。
- (7) A. インケルスはその著『社会学とは何か』（1964, 辻村明訳, 1967, 至誠堂）のなかで、「共產主義者の支配がはじまるまえに、中国の単科大学や総合大学には、約 140 人の教師のもとで、1000 人以上の学生が社会学を学んでいた。しかし、新しい政権はこれらの活動を完全に踏みつぶしてしまい、マルクス主義に関する新しい課目にとりかえた。生き残っている社会学者たちは、彼らの過去の職業ゆえに日陰者の生活をおくっている。新しい政権が支配を確立する以前に、社会学に関する一流の論文を書いた孫本文（Sun Pen-wen）博士は、彼の一連の著作がほしいと手紙を送ったアメリカの社会学者に対して、次のようなゾツとするような返事を送ってきた。・・・」（pp.204~205）と記し、また韓明謨もその著『中国社会学史』（1987, 星明訳, 2005, 行路社）のなかで「かれは（孫本文）は長期にわたり大学のなかで社会学の教育と研究に携わり、わが国の大学の社会各界のなかでもっとも影響力をもった人物の一人である。孫本文はわが国の古くからの社会学者のなかで、もっとも多くの著作をもった学者といえることができる」（p.148）と記している。また、本翻訳稿の末尾の資料 1「（孫本文）自伝」、資料 2「『社会学原理』とびらの記載」、資料 3「保存旧著選集の巻次和内容」および資料 4「孫本文文学年譜」を参照されたし。
- (8) 拙稿, 2015, 著名社会学者孫本文の二つの社会学観の通底性について－民国期から新中国成立期まで－, 社会学部論集, 第 61 号, 佛教大学, pp.1~18。

- (9) 孫本文の1948年の他の発表論文には約15編、著書には『当代中国社会学』1冊がある（陳定閔、1992、孫本文研究、『孫本文文集』（第10巻）の附録2に所収、社会科学文献出版社、pp.201~202。
- (10) 1963年9月、人知れず自らの著作集の出版を計画した時も、1949年以前の自著を反面教材として位置づけた。本訳稿の資料2および3を参照されたし。なお、著作集は『孫本文文集』（全10巻）として、2012年5月に、社会科学文献出版社から出版された。
- (11) 孫本文のこの論文 *Sociology in China* が掲載された雑誌 *ソーシャル・フォース* の27巻、3号の発行は1949年なので、「50年足らず前」とは1900年前後である。孫本文はここで「…社会学は中国の起源のものではなく、50年足らず前にヨーロッパとアメリカから輸入された」（傍点は星）としているが、実際は1900年代初期には日本からも社会学が輸入されたのである（訳者註の21を参照されたし）。
- (12) H. スペンサー著、1873、*The study of sociology*、嚴復訳、1903、群学肄言、上海文明翻訳局を指す。なお、最近、中国で古典名著とした出版された同翻訳書のタイトルは『社会学研究』と改題されている（*The study of sociology*: 中英対照全訳本、2012年、上海世界図書出版公司）。
- (13) 孫本文はここで明示していないが日本の社会学書とは、岸本能武太著、1900、社会学、大日本図書、章炳麟訳、1902、社会学、上海広智書局を指す。
- (14) 群学から社会学へ、あるいは群学と社会学の併存から社会学への用語の移行については、拙稿、2005、新中国成立以前における中国の社会学に対する日本の社会学の影響について、社会学部論集（佛教大学）、第40号、とくにpp.161~163を参照されたし。
- (15) ここでは蔡元培と胡適の名前があげられているが、この運動を推進させた人物には陳独秀、魯迅、錢玄同、李大釗、吳虞、周作人らがあげられる。
- (16) 中央大学は新中国成立後、南京大学と改名された。
- (17) 孫本文は9名と記しているが、1930年9月の中国社会学社成立会記によれば、第1期の理事には孫本文（中大）、許仕廉（燕大）、吳澤霖（大夏）、楊開道（中大）、錢振亜（滬大）、吳景超（金大）、陶孟和の7名が理事に、應成一、王際昌、游嘉德、胡鑑民、吳文藻の5名が理事候補に選ばれている。また、各理事の互選によって、孫本文が正理事に、許仕廉が副理事に、吳景超が書記に、吳文藻が会計に選ばれ、潘光旦、許仕廉、孫本文、吳景超、游嘉德、應成一、吳文藻、吳澤霖、李劍華の9名が編集委員に選ばれている（中国社会学社成立会記、1930年9月、社会学刊、第1巻第4期、東南社会学会、p.1）。
- (18) ここで1930年2月に開催されたとしているのは中国社会学社成立会であり、会場は上海四川路青年会であって、実際には第1回の年会は1930年12月29日に南京の中央大学科学館致知堂での開会式からはじまり、会務報告の後、29日午後から31日の正午まで研究報告がなされている（中国社会学社第1回年会記事のなかの開会情形、1931、社会学刊、第2巻第3期、pp.1~5）。
- (19) S学説の基本的な意義とは、孫本文によれば、自然科学の方法を応用して、社会状況を説明する学説であり、「S」は社会状況（Social Situation）を表す。もともと社会学を研究するひとはみんな純粋な理論および方法の探求を重視しているように思う。S学説は観察可能で、そして測定可能な社会的データを用いて、経験のなかから社会現象についての実際の客観的な認識を得る。そして、綿密な社会学体系を構築しようとするものである。
- (20) 孫本文主編・国立編訳館編訂、1945、社会学名詞、重慶正中書局。
- (21) 孫本文はこのアメリカのソーシャル・フォースの論考では、日本の社会学からの影響について、ソシオロジーの日本語訳の社会学を採用したこと以外まったく言及していない。しかし実際には中国の社会学の初期の1900年前後から1920年代には多くの社会学、社会科学の日本の書物が翻訳されたし、清末期の1万に近い日本への留学生のなかに社会学を学んだ人々もいたのである（拙稿、2015、社会学にみる日本と中国の関係について—清朝末期から民国末期までを中心に—、社会学部論集（佛教大学）、第60号）。



- (22) 中国社会学社の成立大会と第1回年会は、往々にして同じものと記述されているが、まったく別のものである。すなわち、成立大会は1930年2月8、9日の両日、上海四川路青年会で開催され（中国社会学社成立会記、1930年9月、社会学刊、第1巻第4期、東南社会学会、pp.1~2を参照のこと）、そして第1回年会は1930年12月12月29日午前9時から31日正午まで、南京の中央大学で開催されているからである（中国社会学社第1次年会記事、1931、社会学刊、第2巻第3期、中国社会学社、pp.1~7を参照のこと）。

資料1 「(孫本文) 自伝」

わたしは教育者の家庭の出身である。父はかつて小学校長を務めたことがあるが、家は生活が苦しかった。したがって、わたしはずっと自分のことは自分でやっており、いつも貧しい児童であった。1906年小学校入学、1909年江蘇師範学校入学、1915年北京大學入学、1918年南京高等師範付屬中學教員になり、1921年江蘇省公費アメリカ留学試験合格、1926年帰国、復旦大學教授になり、1929年中央大學教授になり、1949年に至る。解放後も繼續して教職に就き、いまに至る。これがわたしの非常に大まかな経歴である。

わたしは家庭とかかわりで、幼いころから、教育の仕事に志があったので、師範学校に入学し、その後北京大学に入学して中国哲学を研究したが、やはり教育方面をずっと重視していた。出国して留学する以前、わたしの望みと興味は一貫して教育方面にあり、小学校教員に一学期、中学校教員に2年半就いた。外国に留学してから、わたしは社会学を専攻しはじめた。わたしはすでに北京大学で社会学を学んでいたけれども、この時にやっと全力で研究するようになった。このように、わたしは教育に力をいれる以外に、社会学の研究も重視した。こと時から、わたしは社会学を自分の専攻する学問としたが、教育を終生の仕事にした。だから、留学して帰国後、直ちに教育の仕事に従事し、大学教授になり、いまに至るまでまたたく間に25年が過ぎた。この期間、わたしは教授の任に就く以外に、かつて社会学部長、学院長、教務長、校務維持委員会常務委員および国民政府の教育部の高等教育局長などに就いてきた。これらのことを思うと、教育の仕事は少しやったに過ぎない。またこの期間、授業をする以外に、社会学および社会問題に関する書物を約24冊、編集したり、著したりした。自らは、これは学術方面で少しばかり多く努力したに過ぎないと思っている。わたしは以前、社会学の方面で多くの著作を書き、多くの人材を育てたが、これはわたしの国家の教育と学術に対する一定の貢献だと考えた。わたしの長年来の大学での仕事はこのようである。

解放後、わたしは一所懸命にマルクス主義と毛沢東思想を学習し、階級的視点を一応確立した。政治的自覚を高めて、わたしの以前のような超現実的な階級の観点、純学問的な観点は完全に誤りであることを認識するに至った。したがって、ここ数年来、政府と学校のすべての呼びかけにこたえて、すべての合同講義やグループの政治学習に出席し、すべての大衆行進に参加した。簡単にいえば、わたしはすでに新民主主義の革命活動に参加したと自負している。わたしは自分の思想水準と政治認識を高めた共産党に感謝しなければならない。毛主席はわれわれに「学習の敵は自己満足である」といった。わたしはいま自己満足の理由がなく、いっそう学習に励まなければならない。

1951.8.12

出典：『孫本文文集』（第10巻、1949年后専著、論文及其他）、pp.173-174。

資料2 「『社会学原理』 とびらの記載」

およそブルジョアのものは、すべて分析し、批判しなければならない。同時に、また反面教材として、マルクス・レーニン主義の教育を深める教科書とすることができる。この書も例外ではない。この古い著書を残して、後の世代のひとの比較研究に供したい。わたしがこの著書を出版した時、すべて国家と人民のためになると誤って認識していたので、この書が反科学的で、反人民的であることがわからなかった。もしわかっていたら、誰がこんなにまで大きな力を費やして、書きたいと思うであろう。

1963年8月 作者記 この時73歳

当時、わたしは中国はブルジョア民主主義革命を経て、資本主義の民主国家をつくらなければならない、そのためにはブルジョア社会科学を發展させなければならないと考え、これが国家と人民のためになると思っていた。

再び記す

出典：『孫本文文集』（第 10 卷，1949 年后專著，論文及其他），p. 174。

### 資料 3 「保存旧著選集の卷次和内容」（1927 ～ 1948）

- 第一卷 『社会学原理』（上）（1944 年増訂版）
- 第二卷 『社会学原理』（下）（同上）
- 附卷 『社会学原理』（第 1, 2 卷合訂版，1935 年初版）
- 第三卷 『社会心理学』（上）（1946 年初版）
- 第四卷 『社会心理学』（下）（同上）
- 第五卷 『現代中国社会問題』（1）家族問題（1942 年）
- 第六卷 『現代中国社会問題』（2）人口問題（1943 年）
- 第七卷 『現代中国社会問題』（3）農村問題（1943 年）
- 第八卷 『現代中国社会問題』（4）労資問題（1943 年）
- 第九卷 『社会学上之文化論』（1927 年）
- 第十卷 『社会思想』（1945 年）
- 第十一卷 『近代社会学發展史』（1947 年）
- 第十二卷 『当代中国社会学』（1948 年）
- 第十三卷 『社会学綱要』（1928 年）
- 第十四卷 『人口論綱要』（1928 年）
- 第十五卷 『中国社会問題簡編』（1939 年）
- 第十六卷 論文集 “社会学体系及其流派”
- 第十七卷 論文集 “中国社会的特点和问题”
- 第十八卷 （外編）『社会学大綱』（上）（1931 年）
- 第十九卷 （外編）『社会学大綱』（下）（1931 年）
- 第二十卷 （外編）『現代社会科学趨勢』（1948 年）
- 附卷 『西方資産階級社会学家像』（未出版）

#### 結語

旧時代に書いたこれらの著作は、当時の社会歴史的條件によって決定づけられたものである。“社会存在が社会意識を決定する”。学術思想の發展は一定の客観的法則と符合するものであつて、人びとの意思に應じて、変わるものではない。これらの著作を保存して、後の世代のひとの分析と批判を待ちたい。

解放後、わたしのこれらの旧著作に対する自己批判については、別に『新著選集』第一卷「現代ブルジョア社会学に対する批判論文集」（1956 ～ 1962）を参照されたい。

1963 年 9 月 2 日 孫本文記 73 歳

出典：『孫本文文集』（第 10 卷，1949 年后專著，論文及其他），pp. 175～176。

資料4 孫本文学術年表

1892 年（清光緒十八年）

江蘇省呉江県に生まれる。父は貢生で、郷の小学校長。

1906 年（清光緒三十二年）

呉江震澤明体学堂に入学し、新学を学ぶ。翌年、震澤明体小学堂に転ずる。

1909 年（清宣統元年）

小学卒業し、蘇州江蘇兩級師範学校に合格し、学ぶ。

1915 年

3 月、師範を卒業し、呉江県立小学校で教員になる。

8 月、北京大学文科哲学部門に合格する。

1916 年

この年の秋期、康宝忠（心孚）教授が北京大学で講義した社会学の科目を履修した。これは中国の近代の国立大学がはじめて開設した社会学の課程である。

1918 年

7 月、北京大学文科哲学部門を卒業。

9 月、南京高等師範附属中学で教員になり、国文と哲学の科目を担当。

1920 年

江蘇省公費アメリカ留学生に合格。翌年 4 月にアメリカに行き、7 月、イリノイ大学大学院に入学して、社会学と社会調査を専攻し、教育理論も合わせて学ぶ。

1922 年

イリノイ大学社会学修士号獲得。同年、コロンビア大学大学院に進み、社会学、社会心理学、統計学を専攻。在学中、アメリカの早期の重要な社会学者の F. H. ギディングズ、R. S. ウッドワース、W. F. オグバーンなどから大きな影響を受けた。

1924 年

7 月、ニューヨーク大学大学院に進み、主に社会学、高級社会心理学、教育心理学および統計学を学ぶ。翌年 6 月、論文「美国対華輿論之分析」(China in the American Press: A Study in the Basis and Trend of American Public Opinion toward China as Revealed in the Press) でニューヨーク大学哲学博士学位を獲得。同年、シカゴ大学に入って、博士後の研究を行ない、合わせて経済学の科目を学んだ。シカゴ学派の影響を大きく受けた。

1926 年

アメリカから帰国。大夏大学の夏期学校で短期間教員に就いた後、復旦大学社会学部の教授になり、社会調査、社会学、社会問題、社会心理学などの科目を講義した。

1927 年

復旦大学社会学部の教授を継続。この年、『社会学上之文化論』を北平朴社から出版、これは帰国後、はじめて正式に出版した著作である。この年また『社会問題』を世界書局から出版。

1928 年

孫本文、潘光旦らの提案によって、上海、南京など各大学の社会学者 10 数人が協同して「東南社会学会」を設立した。孫本文は常務委員兼学会誌『社会学刊』の編集長に選ばれる。

この年、3 冊の著作および数編の論文を書く。

1929 年

2 月、中央大学社会学部教授に就く、この時から亡くなるまで一貫してこの大学に勤める。秋期から、社会学部長を兼任。冬季、「東南社会学会」が全国規模の学術団体「中国社会学会」に拡大、学会誌『社会学刊』はいままでどおり孫本文が編集長に就いた。

この年から、『社会学叢書』を企画し、編集長としての出版を開始。そのなかには孫本文の著『社会学領域』、『社会的文化基礎』、『社会変遷』の 3 冊が含まれている。その他の 12 冊は孫本文が国内の著名な社会学者を招聘して執筆をしてもらった。

この年発表した重要な論文には「サムナーの学説およびその社会学に対する貢献」(『社会学刊』, 第 1 巻第 1 期), 「文化と優生学」(『社会学刊』, 第 1 巻第 2 期), 「再論文化と優生学」(『社会学刊』, 第 1 巻第 2 期), 文化の伝播およびその選択作用」(『国立中央大学半月刊』, 1 巻 1 期) などがある。

#### 1930 年

2 月, 「中国社会学社」成立大会および第 1 回年会在上海で挙行され(ママ)<sup>(22)</sup>, 孫本文が第 1 回正理事(理事長), 会長兼『社会学刊』編集長に選ばれる。学社の成立大会が, すなわち第 1 回年会となった。理事長として年会で, 2 編の論文を発表した。

5 月から, 国民政府教育部高等教育司長を兼務。

今年から, 中華教育文化基金会理事の担当開始。

この年発表した重要な論文には「中国文化研究芻議」(中国文化研究管見)(『社会学刊』, 第 1 巻第 4 期), 「人口問題中之文化要素」(『国立中央大学半月刊』, 1 巻 14 期) などがある。

#### 1931 年

2 月, 南京で開催された「中国社会学社」第 2 回年会上に参加し, 「中国社会学の過去, 現在そして未来」の主旨講演を行なう。理事長に継続して当選。

この年, 主編の『社会学大綱』を世界書局から出版。

年末に, 教育部高等教育司長の職務を辞して, 中央大学社会学部長に専念。

#### 1932 年

8 月, 中央大学社会学部が廃止され, 独立した「哲学部社会学科」に改められる。いままでどおり教授に就く。

9 月, 大学教務長を兼任。

この年, 主編の『中国人口問題』を世界書局から出版。

#### 1934 年

2 月, 中央大学教務長の職を辞す。

8 月, 中央大学社会学部が再建され, もとどおり学部長に就く。

この年, 編著『社会学用書要』を中国社会科学出版部から, また主編『社会学から社会問題へ』を中華書局から出版。

#### 1935 年

2 月, 上海で「中国社会学社」第 4 回年会上に参加。

この年, 代表作の『社会学原理』が「大学叢書」の一冊になり, 商務印書館から出版される。前後して, 11 回再版された。

この年にはその他, 「現代社会心理学の学派およびその最近の趨勢」(『東方雑誌』, 32 巻 7 号) などの論文がある。

#### 1936 年

1 月, 南京で「中国社会学社」第 5 回年会上に参加。

8 月, 中央大学社会学部が再度廃止になる。孫本文はいままでどおり, 哲学部社会学科の教授に就く。

9 月, 中国統計学社に参加。

今年から, 中央政治学校社会学の教師を兼任。

この年, 「社会建設に関するいくつかの基本的問題」(『社会学刊』, 第 5 巻第 1 期) などの論文を発表。



1937 年

1 月、上海で「中国社会学社」第 6 回年会に参加し、論文「中国文化を研究する方法問題」を発表。ただ一人継続して、編集常務委員に選ばれる。

秋から冬へ移る時に、中日戦争で南京に危険が急迫したので、大学の四川省重慶沙坪壩への移転にともない、かれも移った。それゆえ、中国社会学社の刊行物『社会学刊』も停刊になったが、1948 年に回復することができた。そのうえ、主編の『社会学詞典』は上海で印刷にまわした時、戦火で焼けてしまった。

この年、発表した重要な論文は「中国文化の世界での地位」（『政治季刊』、1 巻 2 期）、「現代社会学の起源、発展および最近の趨勢」（『社会学刊』、第 5 巻 2 期）などである。

1938 年

二男の孫世実が国のために命をなげうつ（1949 年後、革命烈士として追認される）。

1939 年

著作『中国社会問題』が青年書局から出版され、主編『社会組織』が世界書局から出版される。今年から、国立編訳館社会学名詞審査委员会主任委員になる。

1941 年

9 月から、中央大学師範学院院長を兼任、1944 年 2 月まで。また、一時師範学院附属沙校校長。この年、「農村問題」、「中国農村建設運動」（『青年中国季刊』、1 巻 3 期）などの論文を発表。

1942 年

9 月、社会学部が回復し、中央大学社会学部長、教授、師範学院院長に就く。

国民政府教育部學術審査委員会の評議を経て、30 名の「部招聘教授」の一人に招聘される。同時に、国民政府試験院選考委員試験委員に就き、社会学と社会行政の科目の出題、採点を担当する。『現代中国社会問題』の第 1 冊「家族問題」を重慶商務印書館から出版。

1943 年

2 月、「中国社会学社」の第 7 回年会が中日戦争のために重慶、成都、昆明の三地域に分けて開催された。孫本文は重慶の年会に参加。孫本文、柯象峰、陳達とともに常務理事に選ばれる。

『現代中国社会問題』第二冊「人口問題」、第三冊「農村問題」、第四冊「労資問題」が商務印書館から出版される。

1944 年

中国社会学社と国民政府社会部が『社会建設』月刊を共同で出版。孫本文は編集長になる。

この年発表した重要な論文は「社会学体系大意」（『国立中央大学社会科学季刊』、1 巻 2 期）、「社会学の最近の趨勢」、「社会心理学の最近の趨勢」（『国立中央大学社会科学季刊』、2 巻 1 期）、「社会学と社会行政」（『社会建設』創刊号）、「近時社会学上の一種の新理論—S 学説」（『東方雑誌』、40 巻 16 期）などである。

1945 年

著書『社会思想』が商務印書館から出版される。

1946 年

抗戦勝利後、中央大学が重慶から南京へ戻るのに伴って南京に戻る。

代表著作『社会心理学』が商務印書館から出版される。

1947 年

中央大学社会学研究所主任を兼任。

「中国社会学社」第 8 回年会に出席し、「国内 20 人の社会学者の社会学のいくつかの基本問題に対する意見」、草稿「中国社会学の今後の取るべき道」を発表。三回目の学社の理事長に選ばれる。

著書『近代社会学発展史』が商務印書館から出版される。

1948 年

社会学部開設および孫本文主任教職 20 周年を記念するために、中央大学社会学部が特別に奨学金を設ける。

「中国社会学社」第 9 回年会に出席し、論文「20 年来之普通社会学」を発表。

代表著作『当代中国社会学』が南京勝利出版社から出版される。

その他に、主編『現代社会科学趨勢』が商務印書館から出版される。別に「最近中国社会学発展の趨勢」(『社会学刊』, 第 6 卷), 「社会建設の基本知識」(『社会建設』復刊 1 卷 1 期), 「現代社会学研究の範圍」(『学原』, 2 卷 3 期) などの論文および社会調査報告がある。

1949 年

4 月、中央大学第 2 回「校務維持委員会」主席に就き、教員と学生を引率し、学校の秩序を維持する。5 月まで大学を南京市軍管会へ移行させる任務の代表に就く。

この年、「中央大学」が「南京大学」に名称変更された。社会学部が廃止されて、孫は政治学部に移動した。

1950 年

南京大学政治学部の教授に就く。同年、世界平和を守る委員会南京分会社会組織研究員に招聘される。南京市政协党史研究会に参加。江蘇省社会科学連合会理事、南京經濟学会理事、副理事長、『江海学刊』編集会委員などの職に就く。

1951 年

華東革命大学政治研究院に入り、思想改造を学習し、実行する。

1953 年

南京大学地理系統計学教授に就く。同年から江蘇省政協委員に就く。

1957 年

「8 億がわが国のもっとも適切な人口である」(5 月 11 日、『文匯報』) を発表。

1962 年

本年度、政治学部で「現代西洋ブルジョア社会学批判」の講義をはじめる。

「現代ブルジョア社会学概況」(『江海学刊』, 1 月号), 「康有為と章太炎がもっとも早くブルジョア社会学を中国に伝えた」(『江海学刊』, 4 月号) を発表。

学術の著述を堅持し、「ドイツ古典哲学者ヘーゲルを論ず」などの訳がある。他に「現代西洋ブルジョア社会学学派の紹介」、「中国人口計画出産問題」などの自筆の原稿がある。

1965 年

南京大学で「哲学英語精読」の科目を講義。

1972 年

この年から、ヨーロッパ国別史と国連文献資料の翻訳の仕事に参加した。

1979 年

2 月 21 日、病気のため南京で逝去、享年 88 歳。

出典：陸遠、孫本文学術年表、『孫本文文集』(第 10 卷, 1949 年后専著、論文及其他), pp.279~285。

〔付記〕

この翻訳の訳者注で参考した 1949 年以前の図書、雑誌の閲覧には上海社会科学院図書館、上海図書館および北京の国家図書館の担当の方々の方に一方ならぬお世話になった。とくに、上海社会科学院図書館では占有できるスペースまでつくっていただき、資料を書庫に収納すること

なく、数か月にわたってそのまま卓上におかせてくださったし、上海図書館では多種の雑誌をデジカメ撮影させていただいたし、国家図書館からは雑誌の欠号がわかったとか、コピー中に雑誌（1930年ごろの雑誌）がばらばらになり修理するまでコピーができなくなったとかとなんども電話やメールをいただいた。ここにこれらの図書館の方々にここから謝意を申しあげたい。また、2014年度1年間の海外長期研修として、原資料にあたることのできる機会を与えてくださった佛教大学および上海社会科学院のみなさんにここから御礼申し上げます。

（ほし あきら 現代社会学科）

2015年9月24日受理